

甕槌命鹿島ノ經津主命取香取ノ蘆原中津國を平げ、二神出雲の國五十田狹小汀に降居て、十柄劍を抜ひて、倒に地に植て、其鋒端に踞るとあり、是に依て鹿島に石柱を立て、萬世の垂跡を玄めす也、何ぞ鯨の頭を刺といふ事あらんや、又地震の神といふは、外にありと見へたり、日本紀に推古天皇の御宇に地震して、舍屋悉破れぬ、四方に令して、地震の神を祭らしむとあり、然れども其神跡今は絶て、何地に有事をえらす、

〔震雷考説〕一夫世界萬國はてしなく、天の覆ふ所極りなし、其中に水火は萬民を化育し、風雨は萬物を潤澤すといへども、甚しきは天災地變と云、震雷猶是に同じ、略○中

氣比大明神熊襲の箭にあたり給ひ、孔子の伯魚をさきたてし類ひ多かる中に、漢土のいにしへ舜禹の代は、わきて聖代なれども、洪水九年にして、天下の民魚となるとあれば、いかなる聖賢の代にも天災はまぬかれがたし、然に水火風雨の難は通る、に道ありとも、震雷は避るに術なし、天にありては雷、地にありては震、是陰陽の凝にして、天地の病なれば、いづれの時發らんもはかりがたし、雷は陰の凝、地中よりいで、雲中に入り、散じて陽にかへる、激して音をなし、大陰の雨水を降らせ、震は陰の凝り、地中にくだけて陽にかへり、其氣和することなし、重り澀滯りたる所一時に發すなり、陰は閉るをものとし、陽は發することをつかさどる、夏は地上大陽にして、地中陰なり、冬は是に反す、故に夏は雷多く地震少し、冬氣は雷稀にして地震あり、尤陰陽變化の地氣なれば、時節のさだまるにはあらねども、陽氣發せんとする故、大地震ある年は、季候くるひて殊の外あた、かなるものなり、又蘭人の説には、火氣常に地中を周旋して土を養ふ、火生土氣と云、其地脈の周廻のすぢみちを失ひ、火氣の凝たる所一時に發す、是地震なり、發し盡ざる殘氣、山岳に至り火となるといへり、易曰、鼓之以雷霆、潤之以風雨、日月運行、一寒一暑、是則震ひて寒暖を疾くさそふの證なり、少陽の東に方位し、四時には中春に配當すれば、發陽變化にてあた、かなる